

## Rencontre du 15 février 2025 de la congrégation CRSD

### テーマ：希望の巡礼者

希望は 3 つの対神徳の一つであり、教皇フランシスコが「もっとも小さく、もっとも力強い」と定義するものです。彼によれば、それは、一つの顔、復活したイエスの顔であり、それは私たちが神の下に集め、私たちの期待を失望させることはありません(2015 年 11 月 15 日お告げの祈り)。

しかし、今日の世界は大きな期待を抱いており、その期待は、この世界を蝕み、意味を失わせつつある多くの悪を前にして、ますます増大しています：これらの悪とは、武力衝突、死、破壊、隣人への憎しみ、飢餓、「生態学的負債」、出生率の低下、移民などです。その結果、囚人、病人、高齢者、貧困者、若者、移民のための嘆願は、私たちが新しいアレオパゴスとして把握するよう招かれている優先事項なのです。

信仰を試されるこれらの多くの死の場面に直面して、信じる者たちの心には希望が湧き起こります。それは、神は約束を常に果たしてくださることを苦しむ世界に伝えるためです。神にとってふさわしい時に神はいつもそれを成し遂げます。詩編の作者が「主を待ち望め、雄々しくあれ、心を強くせよ！」(詩編 27:14)と呼びかける言葉は、決して時代遅れではなく、今なお深い意味を持っています。

ですから、キリスト者にとって、希望は、私たちの主イエス・キリストの受難、死、復活に新たな視点を向け、それぞれの存在や世界を新たに見ることを可能にする原動力のようなものです。このように、希望は生きることや困難を悪としてではなく、いのちへの約束として捉える方法として現れます。そしてその時、私たちは神によって何も失われることはないと保証する小さな声に満たされることになります。

しかし、では誰が、この産みの苦しみの中にあるこの世において、命の約束を語ることができるのでしょうか。誰が自らを「口のない災いの口」として立ち上がるのでしょうか？ そして、誰がその声を「絶望の牢獄にたたずむ人々に自由をもたらす」(エメ・セゼールの表現を借りるならば！)ために使うのでしょうか？

教皇フランシスコは、希望の美德を再び適用するこのダイナミクスの一環として、希望を持ち続けた聖人たちの生涯に目を向けるよう招いています。この点で、私たちの父である聖ドミニコの証しは、最も模範的な証しの一つであり続けています。

実際、バチカン大聖堂で祈っているときに見た幻の中で、ドミニコは聖ペトロから杖を手渡され、聖パウロからは福音書を渡され、二人から「行って、説教しなさい。神があなたを選んだのだから」言われました。言うまでもなく、ドミニコは恵みの巡礼者であり、当時のすべての男女の心に蒔かれるべき希望の巡礼者でした。これこそ、彼が生涯を通して行ったことであり、「足の裏が風に吹かれている男」と呼ばれる所以です。これが私たちの遺産であり、CRSD の修道女としての DNA でもあります。巡礼者となり、同時代の人々の心に希望を蒔くために常に行脚することです。これは明らかに、私たちがすでに実践していることです。内面的なことについて：私たちのコミノテや高齢の姉妹たちの世話、共通善への関心、修道会のかからだへの関心などを通してなど。外面的なことについて：私たちがすでに慣れ親しんでいる様々なアレオパギにおける様々な明示的・黙示的な説教宣教、身近な人々や遠く離れた人々と接触するために絶えず実存的なフロンティアへ向かうこと、正義と平和のための奉仕、新しい地平を探求する願望などを通して。

しかし、それ以上に必要なのは、私たちの内にある希望を再び燃え立たせることです。「より大胆に」(ブレナー・ブラウン)、肉体的にも、精神的にも、道徳的にも、神を求める良き巡礼者として旅立つことです。そのためには、居心地のいい場所、確信、確立されたプロジェクト、実績、恐怖...を離れ、アブラハムのように、希望に反して希望を抱きながら、未知の世界へと旅立たなければなりません。ドミニコは、周囲がそれを思いとどませる中、あえて兄弟たちを離散させることによって、それを実現しました。希望とは空虚な言葉ではなく、キリストという人格だからです。そしてドミニコの希望は裏切られることはありませんでした。信仰の父アブラハムのように、彼は恵みに次ぐ恵みと多くの息子や娘を得たからです。

マリネス＝ブリュッセル大司教のゴッドフリード・ダンネルス枢機卿が、教会になぞらえてこう言っています。聖ドミニコの息子や娘である今日の私たちの課題は、「不寛容を広めることなく福音を宣べ伝える方法を学ぶことです。さまざまな哲学的信念、さまざまな形の信仰や信念が共存する環境において、どのように福音を宣べ伝えることができるかを学ぶこと。学び…他人の信念を傷つけないという正当な配慮が、恥ずかしさや恐れから、無関心や相対主義や怠惰に陥らないようにする方法について学ぶこと。」言い換えれば、私たちが「透明で、謙遜と静けさのうちに証しする方法を知っている福音宣教師であり、私たちの生活と言葉、私たちの存在と外見の間の完全な調和によって喜ばれる福音宣教師」であることを学ぶのです。(聖ドミニコのイメージです！)

私たちは、自分の習慣や過去にとらわれることなく、「神の恵みによって自分自身を再び調整する」ように絶えず招かれています。教皇庁の新しい説教者であるロベルト・パゾリーニ神父は、2024 年待降節の説教で次のように述べています。「明確な悪に対してだけでなく、物事を真剣に考え直し、一緒に実行する勇気を持たずに物事を続ける習慣という微妙な悪に対しても、多くの『ノー』が言われるのを待っています。しかし、これらの『勇気あるノー』を言うには、神が私たちの歴史の中で働いておられ、『最高のものはまだ来ていない』と信じなければなりません。ここで注目すべきは、言葉として発することができる『ノー』と同じくらい多くの『イエス』があるということです！

今日の世界、教会、奉獻生活を揺るがす逆風にもかかわらず、また、召命の減少、高齢化、時には信頼性の喪失、修道生活が消滅しつつありますが、その結果、世界の希望が枯渇してしまうような印象にもかかわらず、私たちが恵みの岐路 に立っていることは紛れもない事実です！すべては、物理的であろうとなかろうと、内的であろうと外的であろうと、新たな地平に向かう巡礼者として、私たちがどのような転機を迎え、どのような錨を下ろすかにかかっています。

地に落ちた一粒の麦が、農夫が眠っていようとまいと、時が来れば実を結ぶように、私たちは種まきがうまくいくことに関心を持つように招かれています。あとは、すべてをその時その時に実現させてくださる方に委ねるのです(アフリカの格言)。これは忍耐への招き、根気強さの別の側面への招きであり、神の時を実現するために私たちの世界が最も必要としている枢要徳です。

スール フローレンス ロコ o.p.